

言葉のことを考えて見た

<1> 最初に覚えた言葉

静岡県吉原市(今の富士市)に生まれて、小学校の5年生までをここで過ごした。私の体の中に流れる「基本言語」はここで出来上がった。極端に特徴のある言葉ではないが、大人になってからわかったことが、いくつかあった。

「いいねえ」「これでいいんじゃない?」を意味する言葉「いいじゃん」は、神奈川県という言葉と同じ。

「そうでしょうね」「そうだろ?」を意味する言葉「そうずら」は、山梨県という言葉と同じ。

「あなた」「おまえ」を意味する言葉「おみやあ」「わりゃあ」は、名古屋という言葉と同じ。

地図を見ればなるほどと納得が行くが、人の動きが「言葉」を運び、その地に土着するという歴史の結末なのだろうと思う。最初に侵入してきた時には驚いたかもしれないが、徐々に根を張り定着するともう当たり前な存在になってしまうという長い足取りを辿ったのかも知れない。

<2> 二つ目の言語

小学校5年生の時に、宮城県南部の山間の集落に転居した。いくつかの村が合併して町という地名になりはしたが、毎日の生活の中で感じる印象は「村」そのものだった。

県内の学校からの転校者がたまにものもの、静岡県からの転入者には先生も驚いたようだった。

しかし、それ以上に驚いたのは私自身で、これまでに身につけた言語では通じない。

男の子も女の子も皆、自分の事を「おれ」と言う。(今風に言えば「ジェンダー・イクオリティ」か?)

「僕は…」と語り始めれば、啞然とした顔で注視されるし、言い回し以外にも「物の呼び名」も全く違うので、戸惑いのスタートになった。

しかし、言葉の違いに関心を持って受け入れる人が多く、すぐに接近してきて不明なことを教えてくれる友達が出来た。歩いて一時間の登下校の途中での会話や、様々な出来事を通じての通訳やサポートをしてもらう内に、一ヶ月もせぬうちに双方向のコミュニケーションが可能になった。我がことながら、子供の頭脳は柔軟で受容性が高い。

さらに一ヶ月も経てば、家の中での兄弟の会話もう現地語になってしまった。転入者が馴染んで融け込むことが主体で、現地人が外来語を導入して活用する場面はあまりない。揺らぐことなく言語が守られているように感じた。

かくして、私の第二の言語(宮城県伊具郡の田舎の言葉・世間では東北弁とひとくくり言うが)は身に付いた。

<3> 三つ目の言語

小学校6年生の途中で東京へ転校した。東北の片田舎から転校してきた私は坊主頭だが、新しく入った教室にいる男の子は皆頭に毛が沢山あった。担任教師に促されて、教壇に立って自己紹介をしたら教室には、どっと笑いが走った。

昭和30年頃の東京は、東京言葉の壁が建てられていたかのようで、他国の言語が入ってくると軽蔑に近い嘲笑があった。それは私より後から転校してきた人を受け入れる場面でも同じことが繰り返されたので、その壁を強く感じた。

一般社会では、「東北弁」「ズーズー弁」と呼んで、特別視する風潮があった。

私の耳からすれば、「日比谷」を「しびや」と読む言葉使いの方が遙かに嘲笑すべきものだと感じていたが、少数意見以下のものだった。

私の体の奥底には静岡県で仕込まれた、あまり癖のない基本言語が居座っているのです、東北の片田舎の言葉は程なくして消えた。しかし、突如母が東北弁を語れば、意味も解るし即応も可能だった。

中学生になり人混みへ出かけると、まれに東北弁らしい言葉で道を尋ねられることがあった。多くの人が言葉を理解できないために応答できずに困っていたが、そこに割り込んで人助けをすることが何度かあった。

やがて、「俺は三つの言語を理解できる」と、心の内では優越感を感じるようになった。

<4> 四つ目の言語

35才の頃に転勤して、4年ほど福岡市の九州支店で仕事をした。

九州支店に着任して一息つき、徐々に景色がわかってきた頃、職場の仲間は大きく分類すると三種に分類出来るように感じた。

私のように「東京から転勤してきた人」、「大阪から転勤してきた人」、「福岡およびその周辺に住む人」。これを横軸として、縦軸には「出身地が福岡およびその周辺である人」と「その他の出身地の人」がいる。つまり大袈裟に言えば「人種のるつぼ」のような状況だということがわかった。

これらの背景には、会社の都合によるものではあるが、九州支店がまだ営業所だった頃、大阪支店の配下だった時代があったことも関係していたようだった。

職場で耳に入ってくる言葉を注意深く聴いていると、「福岡およびその周辺の言葉」で会話しているのは、現地採用の事務職の女性だった。しかし耳慣れてくると微妙に違う言葉のやりとりが見えてきた。「福岡市内に住む人」と「福岡県の福岡市以外に住む人」と「隣接する他県」から通ってくる人がいたことによるものだった。事務職同士の会話は、互いに言葉の壁を感じないでリラックスして喋るせいか、「方言」が感じられた。

日常耳に入ってくる男性同士の会話は、あまり地域性を感じないものが多いが、議論伯仲の状況や、気を許した時間外の飲み会になると、それぞれの人が各々の出身地の言葉を噴出させることがある。家に帰れば、小学校一年生と幼稚園生の二人の娘が「異言語」の國で様々な体験をしていた。

福岡に転居して一ヶ月程度の頃、些細なことから姉妹げんかの舌戦が始まった。興奮した言葉の応酬の中で、「何しよーと?」という見事な福岡言葉の応酬になったのを横で聴いていた私が

「何だ、お前ら、もう福岡の言葉で喧嘩できるのか?」と笑ったことで、二人とも笑い出して、集結した。繁華街へ出ると、地元の言葉による会話がたっぷり聞かれる場所と、地元の言葉は消え失せて、東京にいるのとあまり変らない会話が聞こえてくる場面とがあることがわかってきた。

各地から転入してきた人が混ざり合う場所では、共通言語が幅を効かせることになるらしい。

異言語人種が混ざり合うことで、その中で通じ合える「新しい共通語」が生まれている感じがした。

こういった現象は我が社のみならず、多くの会社の中で見られる現象だったと考えられるので、東京や大阪に本社がある会社の支店や営業所が数多く存在する六大都市などでは、地元の言葉が少しずつ変形することになったと考えられる。福岡・仙台などのオフィス街では地元の言葉が聞かれなくなったという話を何度も耳にしことがある。

福岡で暮らしたのは4年間だった。九州各地を動き回る仕事をしたせいか、福岡に限らず各地の言葉を聞いて理解できるようになったが、自分で喋ることはできなかった。一日の大半の時間を過ごす勤務先では、人種のるつぼの中で「共通言語」を使う場面が多かったからなのかもしれない。

一方、娘達は完全に「福岡言葉の子」になっていた。

外国語を学ぶなら、その國の中に飛びこんでいて暮らすのが一番よいと言って、ホームステイが推奨されるようになったのも頷ける。

<5> 大阪言葉（関西弁）

50才を過ぎた頃だったか、阪神淡路大震災が発生した直後に、サービス体勢の復旧支援の一環として10日ほど大阪に出張したことがあった。

ユーザーのコンピュータが被害を受けたばかりか、我が社の社員の自宅が被害を受けたこともあり、社内には緊迫感もあり異様な空気に包まれていた。

オフィスの中には、東京から転勤してきた人もいたが、圧倒的多数は関西経済圏に生まれ育った人だった。そこに大事件による緊張感が加わったので、着飾った言葉はなく「大阪言葉」が飛び交っていた。そして、「自分の意見は相手に伝えておかなければいけない」という気持が強い地域性なのか、東京から来た人から見ると驚くような激しいやりとりが毎日見られた。

そしてそれから30年、テレビではお笑い芸人があらゆる場面に登場するようになり、その中には関西の芸人が多くなってきた。テレビという媒体を通じて「大阪言葉（関西言葉?）」が全国を駆け巡り、マスコミや評論家などが囃し立てることも手伝って、全国に流布することになった。その結果、多くの人がその言葉を知ることになったのは良いが、本来の意味や用法とは異なる「新しい共通語」が誕生したりもしているように感じる。

たまに、東京の人がテレビで覚えた大阪言葉を使って格好つけたつもりでいたら、横にいる大阪出身の男に、「それ、ちゃうんちゃう?」とたしなめられるというような出来事も出てきているらしい。

上方落語に関心を持つようになったことで、「大阪ことば」にも興味を持つようになり、何冊かの本を読んできた。この夏、特段の用事があったわけではないが猛暑を避けて冷房の効いた書店に飛びこんだ。店頭で「大阪ことばの謎」という本（金水敏著・SB新書）を見つけて、衝動買い。

「大阪ことば」の不思議さや面白さを解明した本で、一気に読んでしまった。

静岡県に生まれて、宮城県を経て東京都に出て、千葉県に転居、途中で四年間を福岡県で過ごした自分にとっての、通り過ぎてきた各地の言葉のことを振り返って見た。

以上